
クリスマス イブ 後編

Y U K I & BOOH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマス イブ 後編

【Nコード】

N2680D

【作者名】

YUKI&BOOH

【あらすじ】

俳優と言っ忙しい彼と平凡なOLとの微笑ましいクリスマスイブを、描いてみました。後編です。

太陽はゆつくりと輝きを失い、辺りは夕暮れの帳を降ろし始めた。

そつと彼の腕に寄り添い甘えてみたくなった。

彼も、それに気づき、吸っていたタバコを海に投げ捨て、私の肩をそつと抱き寄せてくれた。

彼の温もりを感じ、さっきまでの不安も拭い去り一瞬にして心が暖かくなった。

サンタクロースがほんとにいるなら、どうかこのまま時間が止めてください。

そつつばやきながら、そつと目を閉じた。

そんな束の間の安らぎをさえぎるかのように後方から乗船受付を促すアナウンスが聞こえる。

そうだわ！行かなくちゃ・・・。

夜にディナークルーズの予約をしているんだった。私は彼に告げると受付場所へ急いだ。

ふたり分の受付を済ませ、ハーバーに戻ると、先程の場所に彼が居ない。

一瞬場所を間違えたかと、冷静になって周囲を見渡すが、やはり彼

らしき姿は無い。

どこに行ってしまったんだろ・・・

急にまた仕事？・・・それならそうと一言くらい・・・

さっきまでの幸せな時間はなんだったの？

やっぱり、イブに仕事を休むのは無理をさせてしまったのかな・・・

・

無理させてた事、気づいてあげられないなんて馬鹿な私・・・

あははッ・・・こんなに着飾って期待して、私ったら、一人でなにやってるんだろ・・・

今度はいつ会えるのかさえもわからない・・・

頬をつたう冷たい涙を手のひらで拭い去り、こんな時こそピエロのように笑おうと

彼と出逢ったときの楽しかった事を必死で思い出そうとしていた。

人々が停泊している客船の前に集まり始める。夕暮れに包まれた空に真っ白な船体がライト

アップされ 瞬き始めた。

船の出入り口が開き、タラップがゆっくり岸へ降ろされる。

イブのディナークルーズだけあって、周りは、幸せそうなカップルばかり。

船員に案内されながら、人々がタラップを楽しそうに弾むような足取りで渡ってゆくのを見るの

は、取り残された今の私にとって、とても辛過ぎる。

いくら笑って見せても一人でクルーズを楽しめる余裕なんてあるわけない。

俳優という職業の彼を好きになった自分を今更ながら悔やんでみた。

どうして彼を好きになってしまったのだろうと、いつものように、答えの出ない疑問を投げかけながら、この場を立ち去ろうと向きを変えた。

その瞬間・・・

背後から腕をギシツと強く何者かにつかまれ、抱き寄せられた。

彼の愛用のh e rの香りが漂った。一瞬にしてそれが彼だとわかった。

なにが起きたのか頭の中で整理できないまま、さっきまでの、絶望的な感情から、一気に天国へ運んでくれるような幸せがこみ上げて

きた。

話は後から、とにかく急ごう。

・・・うん

出航時刻となった事を告げる船員の声に促されるようにして

すぐにふたりにタラップを渡る。

船は勢い良くエンジン音を作動させる。ゆつくりと大きく旋回を始めた船の振動が体に伝わる。

錨が海底から飛沫を上げながら引き上げられ、ガラガラと重そうな音を立てながら、

船体へ収容されてゆく。

岸では、こちらへ手を振る人々が見える。船から見える対岸は、建物のイルミネーションが眩しく輝いて夜の海にゆらゆらと揺れながら光を映す。

建物に隣接する小さな遊園地から笑い叫ぶ声が乗り物の音と一緒に、時折 聞こえてくる。

観覧車が派手な電飾に瞬き、ゆつくりと回り続ける。

デッキでは数組の男女が寄り添い、思い思いの場所で佇む。

私は穏やかに前進する動きと反対に、後方へ遠ざかる港の景色を潮風に髪を弄られながら見ていた。

潮風が強く体を揺さぶって来る。首をすくめ、腕を手でさする。

彼が私の背後から腕を回し、静かに私の体ごと抱きしめる。

一瞬で鼓動は早くなる。

彼の頬が私の頬に重なり、首筋に彼の温かい息が掛かる。

耳元で彼が囁いた。

・さっきのあの男は誰なんだ？

・あの男？

いきなり現実に取り戻されたかのような　ぶしつけな質問に私の頭は混乱する。

・・！？

もしかして・・先輩の事？

彼を振り返る。

夜の闇の中にサングラスを取った彼の瞳は穏やかな中にも射る様な視線で私を見据える。その瞳の迫力に圧倒されつつも、返答する。

彼は再び私を強く抱きしめる。

・俺の前で他の男と話をするな。

低い声で呟く。

・私は金槌で打たれたような衝撃が体に走った。

まさか・・・彼が・・嫉妬している？彼が・・！？

熱いものが込み上げ、目の前の彼が潤んで見えなくなってゆく。

彼の背中に腕を回し強く抱きしめ大きな胸に顔をうずめた。

彼はそつと私の頬に片手を当て彼の方を向かせた。彼の手がとても温かく感じた。

・・うつむいたままだった私が、ふと顔を上げると、彼は私の頬に唇を重ねた。

ほのかにタバコの匂いがした。

・・下から聞こえる波の音が次第に遠ざかる。

彼への想いで胸は張り裂けそうになり、愛しさと切なさで涙が溢れ、彼もまた、狂おしいほどの力強い愛で、そんな私の全てを受け止めてくれた。

・・抱き合ったままのふたりに寒さなど入り込む隙は無かった。

怖いくらい幸せ・・。

サンタクロースに願い事なんていらない・・・

私は今、彼の腕の中には居るもの・・・

これ以上の贈り物なんて何も望まない・・・

ディナーの準備が出来たアナウンスが聞こえる。

我に返った私は、彼が姿を消していた理由わけを聞いた。

彼は思いだしたかのように、セーターのポケットから小さな小箱を取り出した。

赤と金のリボンが掛けられている。彼の瞳に促され、リボンを紐解く。

もしかしてリング・とか？

期待に胸を躍らせながら、そつと箱の蓋を開ける。

中から、弾むように小さなサンタとトナカイが飛び出して来た。

これは……。待ち合わせ場所で一際目に留まったアンティークショップに並んでいたオブジェ……。

声にならない叫び声が出てしまう。もう一度良く見ると、ゆらゆら揺れるバネの上に
サンタとトナカイが抱き合って揺れている。
……。

なんて可愛い……。これをわざわざ……？

無言のまま優しい眼差しで、普段は見たことの無い、はにかんだ表情を私に向けた。

そっか……。アンティークショップの時からずっと、見ていたのね……。だから……。

と言って笑った。

・悔しいが、少年のような悪戯っ気のある瞳で笑われると、心配させられた怒りは何処かへ

消え去ってしまう。

わざと素っ気無く御礼を述べると、ディナーの待つ個室へと急いだ。

すぐ後を追ってくる彼は、機嫌を伺うように私の顔を覗き込む。

私は微笑みなくなる衝動を必死で抑え、横目で彼を睨む。

彼の口元に浮かんでいた笑みは消え、すぐ真面目な表情に戻り、両手を胸の前に合わせ頭を下げるいつものポーズを気取ってみせた。

ディナーテーブルの上に置かれた小箱から小さく揺れる抱き合うサントとトナカイは

温かく柔らかい光を放つ照明の下で、まるで私たち二人のように、幸せそうな表情を浮かべて

いるように思えた。

F i n B Y Y U K I & B O O H

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2680d/>

クリスマス イブ 後編

2010年11月5日01時32分発行